

忍耐と心の成長

奨励	内 山 伊知郎〔うちやま・いちろう〕
奨励者紹介	同志社大学心理学部長 同志社大学心理学部教授 〔研究テーマ〕乳幼児の認知・感情発達の研究

希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。

（ローマの信徒への手紙 12章12節）

コロナ禍のもと、ご苦勞をされていることと思います。学生の皆様だけではなく、教職員の皆様も授業や学校運営のために常日頃と異なるご苦勞をされておられます。同志社に在学・在職する皆様に神様のご加護があることを祈念いたします。

このように学びたくても思うように大学に来られない、教職員もオンライン授業のため大変な苦勞をするという状況にあると、日頃、何不自由なく出校できていた時をありがたく感じます。今年3月の卒業式の頃から不自由さを感じ始め、瞬く間に4月からは出校が難しくなりました。日頃、満たされた環境にいと、なかなかその良さに気づかないのですが、環境が厳しくなると、さまざまな身近なことに注意が向くようになり、不自由さに敏感になります。

校祖の新島先生はアメリカで学びましたが、現代の私たちが海外留学するようにはいかず、学問を修めるために大変な苦勞をされました。ただでさえ海外に渡るのが難しい時代に、ワイルド・ローバー号でボストンに到着した時には、アメリカに知り合いはなく、受け入れ先もない状況でした。現在の私たちがそのような状況で海外留学することはありませんと思います。

新島先生は1865年7月20日にボストン港に入港し、東ボストンのグランド・ジャンクション埠頭に停泊したそうです。そこで陸に上がり、『ロビンソン・クルーソー漂流記』を購入し、また衣服一式を購入したとあります。しかし船中での生活は続き、8月24日には、波止場で出会った人たちから、「南北戦争以来の物価高騰で世話をしてくれる人がいないだろうから、もう一度海に戻る方がいい」と言われて不安な毎日を送ったとあります。10月11日になって、ワイルド・ローバー号の船主であるA・ハーディー氏に会うことができたのが幸運で、新島先生にとって夢をかなえるチャンスとなったのですが、最初は英語力の不十分さで意思が通じなかったそうです。A・ハーディー氏は新島先生を下船させて、ボストン市内のセイラーズ・ホーム（船員宿舎）に3日間泊めて英語で海外に出国した理由を書かせたそうです。

新島先生はアメリカには着いたものの3カ月近く、先がどうなるかわからない状況で、不安で落ち着かない気持ちであったと思います。きっとA・ハーディー氏に会った時には、暗闇に光が差し込んだように感じたことだと思います。慣れない英語で気持ちを綴る時には持てる力を最大限に発揮されたのだと思います。

新島先生はハーディー氏に受け入れられたことで大きく道が開けましたが、アメリカでの生活は楽でなかったと思います。学習のプロセスで得意な科目もあれば、なかなか慣れない科目もあったと思います。現在でも、アメリカの大学院入試の共通テストであるGREでは、日本人は数学の得点を取りやすいが、言語は難しいと聞いたことがあります。新島先生もラテン語など、英語の古典にあたる科目は特に慣れなかったと思います。アメリカで学問を修めるまで、並々ならぬ苦勞をされたことだと思います。

また、新島先生はアメリカ生活の中で病に苦しんだことが記されています。1870年にはリウマチに罹患し、発熱や頭痛などに悩まされています。リウマチには、当時有効な医療が見つかっておらず、発作が続く2週間程度は安静にしている治療法がとられるだけであったそうです。新島先生はハーディー夫人への手紙で、「リウマチにすっかり参って、4週間以上も病氣でした」とか、あるいは「自分の病氣と苦痛を通して、苦難を受けて死に給うた救い主に対して一層共感することができる」と述べ、他者を共感できる境地に至っています。身内から遠く離れた地で病になることは心寂しいものです。ただ新島先生にとって病氣の際にシーリー教授宅で療養できたことは大変心強かったと思います。シーリー教授夫人に宛てた手紙の中で病氣療養中に受けた優しい愛情と親身な看病を感謝しています。冷たいアイスクリームやビーフステーキなどの施しがおおいかったことも記しています。私の魂が生きている限り御恩を忘れることなく、「よきサマリヤ人」にめぐり会えたような機会を感謝していますと記しています。

新島先生は、この苦難の中で、周囲の親切に感謝し、共感性を育んでおられます。このような体験を経て、他者と共感し、神の御導きに謙虚に身をゆだねることができるようになるわけです。そして、アメリカでの知識のみならず、苦難の人生経験を通して大きく成長され、後に日本の教育界に多大な貢献をされることになります。

聖書の中に、「苦難は忍耐を 忍耐は練達を 練達は希望を生む」（ローマの信徒への手紙5章3―4節）という言葉があります。苦勞や困難を経験するとそれに耐える力が育ちます。この耐える力を忍耐力といえます。忍耐力があると、物事に深い洞察をもつ練達というレベルに到達します。練達の生き方にはいつも道が示され、将来への希望が生まれます。新島先生のアメリカでの生活はまさにこの聖書の言葉どおりだったのではないのでしょうか。未知の世界へ飛び込み、苦難の中で生きる術（すべ）を身につけ、将来へ向かっての道を開いています。

では、ここで「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」心のメカニズムについて考えてみましょう。人は自らの道を妨害された時、あるいは所有物を喪失した時などにフラストレーションを感じます。それを自らの力ですぐに解決できない状況は苦難と言えます。幼児期には苦難で怒りを爆発させる子が多いことでしょう。おもちゃ屋の前で買ってほしいと駄々をこねる子供、あるいは遊具の順番待ちができずに割り込んでしまう子供などを時折目にします。自分の思うようにならない状況は苦難であり、欲求不満であるフラストレーションを高めます。フラストレーションが高まると攻撃行動が現れることが多く、フラストレーション行動と言います。何でも思うようにしてくれる保護者や、親が叱っていると甘やかして擁護をする祖父母はよく見る家族関係です。このような状況では、子供はフラストレーションをコントロールする力を養うことが難しくなります。適度到我慢を強いるしつけが、フラストレーションに耐える力であるフラストレーション耐性、つまり忍耐力を育みます。苦難は必ずしも忍耐力を育てるわけではありませんが、苦難につぶされることなく生活できれば、忍耐力が育ちます。忍耐力が高まると、苦難にさまざまな手法で対処することができるようになります。合理的な解決が見つからない時でも、自我が傷つかないような防衛機制が働くかもしれません。たとえば、イソップ童話にある『キツネとブドウ』の話にあるすっぱいブドウが有名です。

狐がおもしろなブドウを見つけたのですが、高い所にあって届かない。狐は悔しさからどうせこんなブドウは酸っぱくてまずいだろうと負け惜しみを言って去っていった、というものです。手に入らないものは、価値の低いものとして、本来は諦めた原因である自分の力不足と向き合うことなく心の平安を得ようとしています。これは本質的な解決ではありませんが、一時的に苦難を耐えるのに一役買っています。でもこれはあくまで諦めの合理化で、心を守ることはできても真の解決にはなりません。

フラストレーション耐性が高いと苦難下において何とかが対処をしようと解決の道を探る気持ちになります。少しでもきっかけがあれば解決につなげていくのだと思います。つまり、忍耐によってちょっとしたチャンスを見逃さないのではないのでしょうか。人は生まれながらに気質と言われる行動傾向が備わっており、苦難に対する対応の仕方に個人差があります。もともと忍耐力が高い人や低い人がいて個人差がみられます。しかし、だれでも苦難の中でちょっとした周囲からの励ましや支援があれば忍耐力は高まります。そこで大切なのは、苦難下でも将来の夢をもち、モチベーションを維持することです。モチベーションがあれば、苦難下でも前を見つめて耐えることができます。周囲からの支援やチャンスのきっかけに気づきやすくなります。

「忍耐は練達を」とは、忍耐力が高まれば問題解決をする力が高まるということです。そして「練達は希望を生む」とは、問題解決ができる自信があれば希望を諦めることはないということではないのでしょうか。新島先生はアメリカでの多大な苦難の中で、自分の夢を実現するためのモチベーションを持続けて忍耐することができたので、アメリカでの目的の達成につながったのだと思います。

日本が開国したことも新島先生にとってチャンスの一つであったかもしれません。

このように京都の同志社で自らの夢を実現し、開学から150年が近づいているのに、今なお学内外で感じられる私たちへの熱い思いに包まれながら、私たちも成長していけないといけないと感じています。